慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	サン＝ランベールの『四季』改訂版における加筆修正作業：「不安」、「倦怠」、「苦痛」の概念をめぐって
Sub Title	Réflexions sur quelques retouches dans les éditions corrigées des Saisons de Saint-Lambert : autour des concepts d' «inquiétude», d' «ennui» et de «douleur»
Author	井上, 櫻子(Inoue, Sakurako)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.59 (2014. 10) ,p.1- 14
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20141031-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

サン＝ランベールの『四季』改訂版における加筆修正作業
――「不安」、「倦怠」、「苦痛」の概念をめぐって――

井　上　櫻　子

1769 年、ジャン＝フランソワ・ド・サン＝ランベールは、イギリスの詩人トムソンの同名の作品[1] に着想を得た自然の歌『四季』を世に問う。この初版自体、20 年あまりの思索の産物であったにもかかわらず[2]、詩人は初版出版後も晩年に至るまで、この作品に加筆修正をほどこし続ける[3]。単なる誤植の修正[4]、詩人自ら支持する「コントラスト」の美学の徹底など[5]、加筆

1）James Thomson, *The Seasons,* 1726–1730. 18 世紀後半のフランスにおける自然詩の系譜の誕生とトムソンの『四季』との関連については、以下の文献に詳しい。Margaret Cameron, *L'Influence des* Saisons *de Thomson sur la poésie descriptive en France (1759–1810)*, Genève, Slatkine Reprints, 1975.

2）サン＝ランベールが『四季』の構想を練り始めたのは、1740 年代末から 1750 年代とされる。*Correspondance de Mme de Graffigny*, Oxford, The Voltaire Foundation, t. I, 1985, p. 7 ; *Correspondance littéraire, philosophique et critique* de Grimm et de Diderot depuis 1753 juqu'en 1790, Paris, Furne, t. VI, 1829, p. 158.

3）初版（*Les Saisons. Poème,* Amsterdam, 1769）から決定版（*Les Saisons. Poème*, Paris, Didot l'aîné, 1796）に至るまでのテクストの変遷については、以下の校訂版にまとめた。Saint-Lambert, *Les Saisons. Poème*, texte établi et présenté par Sakurako Inoué, « Discours préliminaire », STFM, Classiques Garnier, 2014. 特にことわりのない限り、本論考における『四季』からの引用はこの STFM 版によるものとする。

4）Saint-Lambert, *Les Saisons,* « Le Printemps », p. 97.

5）この問題については以下を参照のこと。Saint-Lambert, *Les Saisons*,

修正の目的はさまざまであるが、いずれにせよ、「序文」の以下のような主張からも窺えるように、サン＝ランベールが創造行為において、自ら発信するメッセージの受容者、すなわち読者の存在を強く意識していたことは間違いないだろう。「この作品を公にしようと心に決めてからというもの、きわめて入念に手を加えた。もし真の美があるというより強い確信があったなら、さらに推敲を重ねていたことだろう。それを私に教え示していただくのは、読者諸氏の役割なのだ。直すべきところは読者諸氏から学ぶこととしたい。」[6] そして確かに、定期刊行物に公表されたさまざまな批評[7] と『四季』の改訂版を比較検討すると、詩人が読者の反応を意識しながら改稿を行なっていることも少なくないのである。

本稿では、最も大きな改訂が行なわれた版の一つである 1771 年版から、第二歌「夏」、第三歌「秋」に付せられた「不安」、「倦怠」、「苦痛」の概念をめぐる注記の加除作業に注目してみたい。そして、このような作業がサン＝ランベールにとってどのような意味を持ったのか、その人間論との関連から検討してゆきたい。

Ⅰ．第二歌「夏」の注釈におけるロックへの言及

『四季』第二歌「夏」冒頭には、自然の諸要素を活気づける太陽と猛暑の威力を讃えた後、「神聖なる農業」[8] を礼賛する一節が差し挟まれる。農業は、多くの民を潤し、彼らに幸福をもたらす[9]。のみならず、畑仕事に従事する人々は無邪気さ、純粋な精神を保持しているというのである。

« Introduction », pp. 27–41.

6）Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Discours préliminaire », p. 67.

7）*Mercure de France*, mai 1769, Genève, Slatkine Reprints, t. XCVI, 1971, pp. 68–85 ; *Correspondance littéraire*, 15 février et 1er mars 1769, t.VI, pp. 160–173 et pp. 174–185 ; *Anné littéraire*, t. II, lettre I, 23 février 1770, pp. 3–45, Genève Slatkine Reprints, t. XVII, 1966, pp. 97–107.

8）Saint-Lambert, *Les Saison*, « L'Été », p. 134.

9）Saint-Lambert, *Les Saisons*, « L'Été », pp. 134–135.

奢侈は彼［＝農民］に惨めだ、
父を恥ずかしいなどとは思わせない。
良俗の友たる、中庸、
平和と労働が彼の陽気さを保っている。
彼の未来を左右するのはただ季節の変化のみ。
その欲望と計画はその時々の状況から生まれる。
今日愛するものを明日も愛する。
その心の平安さは、倦怠とはかけはなれたもの[10]。

農民の未来はもっぱら「季節の変化」によって決定され、「その欲望と計画はその時々の状況から生まれる」という一節から、詩人は外界の自然の秩序と調和して生きる美徳を強調しようとしていることが窺える。

サン＝ランベールはただ農耕生活の楽しみを詠うにとどまらない。この引用文の最後の詩行、すなわち、農業に従事する人々の楽しむ「心の平安」と「倦怠」とをはっきり弁別しようとする一節に注を付し[11]、農業従事者の精神状態についてより掘り下げた考察を展開するのである。ここでまず、詩人は人間を含め、大多数の動物が、狩猟を行なったり、手に入れるのが困難な食料を求めたりするよう運命づけられているのは、生物にはある程度の「運動」が必要不可欠だからだと主張する。そして、その論拠としてロックを引き合いにするのである。

もし、人間がたやすく、苦労なしに食料を見つけ、生命を維持し、その

10）Saint-Lambert, *Les Saisons*, « L'Été », p. 136.

11）Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Été › », pp. 172–173. 18 世紀のテクストにおける注記の機能については、以下の論集に詳しい。Nicholas Cronk et Christiane Mervaud, (dir.), *Les Notes de Voltaire. Une écriture polyphonique*, *SVEC*, 2003, 03. 特に韻文に付せられた注記については、ジャン＝アントワーヌ・ルーシェの『一年の十二ヶ月』に関する以下の論考を参照のこと。Catriona Seth, « Les notes de Roucher, ou l'autre poème », pp. 95–109.

> 種を存続させることが出来るような状態にあったとしたら、ロックが述べているような「不安 « uneasieness »」、漠然とした不安、行動する必要を感じるだろう[12)]。

ここで詩人の念頭にあるのは、『人間悟性論』の以下の一節ではないかと考えられる。

> それでは「行動を起こそうという意志を決定づけるもの」について検討してみよう。この問題を再度検討した結果、行動する意志を決定づけるのは、一般的に考えられているような「最大の幸福」ではなく、むしろ現在抱えている何らかの「不安」、そしてたいていの場合、最も差し迫った不安であるように思われる。これこそ、次々と意志を決定し、われわれに行動するよう促すものなのである。この「不安」を「欲望」と名付けてもいいだろう。実際、この「欲望」は、精神の「不安」であり、何らかの幸福が欠けているために生じるのである[13)]。

確かに一読すると、サン＝ランベールもロックも「不安」を人間を何らかの行動へと動機づけるものとみなしているように見える。にもかかわらず、1771 年に出版された改訂版では、「ロックが述べているような『不安 « uneasieness »』」[14)] という一節は削除されてしまうのである。なぜ、詩人はこのような修正をほどこしたのか。以下、『四季』と『人間悟性論』に展開される苦痛と快楽に関する考察に注目しながら検討してゆきたい。

12）Saint-Lambert, *Les Saisons,* « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Été › », p. 172.

13）Locke, *Essai philosophique concernant l'entendement humain*, traduit par M. Coste 1755 (édité par Émilienne Naert, Paris, J. Vrin, 1998), liv. II, chap. 21, p. 194.

14）Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Été › », n. 10, p. 172,

Ⅱ．サン＝ランベールの「不安」、ロックの「不安」

『人間悟性論』における「不安」の定義は、人間の「意志とは何か」ないし「意志を決定づけるものは何か」という議論の中に含まれている。ここでロックは、「欲望（不安）」、「苦痛」、「幸福」の関係性について以下のように述べている。

> 「欲望」は現在感じている何らかの苦痛と比べて、快楽が不足しているために生じる「不安」である以上、この「不安」を和らげることがまさしく欠けている快楽なのであり、不安が和らげられ、「安らぎ」が得られるまで、この「不安」を「欲望」と呼んでいいだろう。というのも、苦痛を感じる人は皆、この苦痛の印象に見合った、そしてこの苦痛と不可分の欲望とともに、苦痛から解放されたいと望むものだからだ[15]。

この一節、とりわけ最後の二行からは、ロックが「苦痛」を感じる状態とは人間にとって望ましいものではないと捉えていることが分かる。そもそも、ロックの議論の前提にあるのは、人間はみな「幸福」を望んでいるという考え方である[16]。「不安」ないし「欲望」は、望ましくない状態（「苦痛」を覚える状態、「幸福」が欠けた状態）から脱却しようと行動する「意志」を抱かせる限りにおいて、人間にとって有益だというのである。

一方、『四季』第二歌の注記では、必ずしも「幸福の獲得」は問題となっておらず、むしろ、「活動の必要性」に焦点を当てた上で論が展開される。その結果、ロックの議論には認められない概念が現れることとなる。それが「倦怠」の概念である。

> 人間が発明する必要も、走る必要もなく、頭を働かせる必要も体を動か

15）Locke, *Essai philosophique concernant l'entendement humain*, éd. citée, p. 194.
16）*Ibid.*, p. 200.

す必要もない状況がある。思うに、このような状況において倦怠を覚えるのだ。倦怠は健康にも幸福にも悪影響がある[17)]。

「倦怠」とは、精神的活動（「発明」すること、「頭を働かせる」こと）も肉体的活動（「走る」こと、「体を動かす」こと）も中止した状態であり、人間にとって望ましくないものである。ロックが「幸福」の対極に「苦痛」を置くのに対して、サン＝ランベールは「活動」の対極に「倦怠」を置く。このことを考慮に入れると、「夏」の注釈の中で詩人が「不安」と呼ぶものと、『人間悟性論』に展開される「不安」の定義は必ずしも合致しないと言えるだろう。なぜなら、ロックにとって、「不安」とは、人間が「幸福」な状態を目指そうという意志を抱く契機を与えるものであるのに対し、サン＝ランベールが「不安」と称するものは、心身ともに活動が停止した状態にある人間が抱く、まさしく「漠然とした」感情だからである。サン＝ランベールが『四季』改訂版において、「ロックが述べているような『不安 « uneasieness »』」という一節を削除したのは、おそらくはこのような見解の相違に気づいたからではないかと考えられる。

Ⅲ.『百科全書』の項目「倦怠」

実際、サン＝ランベールが「倦怠」の概念を形成する上で参考にしたのは、『人間悟性論』よりもむしろ、『百科全書』の項目「倦怠」ではないかと考えられる。ここでジョクール[18)]が執筆したこの項目の冒頭を再読してみたい。

17）Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Été › », p. 173.

18）ダランベールが『百科全書』編集作業から手を引いた後、この大事典刊行計画を遂行する上で重要な役割を果たした。『百科全書』の項目執筆者については、以下を参照した。Richard N. Schwab, Walter E. Rex and John Lough, *Inventory of Diderot's* Encyclopédie, *SVEC* 80, 83, 85, 91, 92, 93, 223, 1971–84 ; Frank A. Kafker et Serena L. Kafler, *The Encyclopedists as individuals : a biographical dictionary of the authors of the* Encyclopédie, *SVEC*, nº 257, 1988.

ジョクールの生涯については、特に以下の文献に詳しい。Jean Haechler,

倦怠（中略）：定義出来ないような不快の一種。思い通りにゆかぬ悲しみでもなければ、沈んだ気持ちでもない。原因は分からないがわれわれの器官の中、あるいは外界にある事物によって生じる快楽の欠落であり、われわれの心を占める代わりに、不安あるいは不快感を生む。「倦怠」はわれわれにとって最も危険な敵であり、情念の墓場である。（中略）つまり、「倦怠」はきわめて特異で、ひどい苦痛であるので、人間は倦怠に苦しめられるのから免れるために、この上なくつらい労働に従事しようとすることがよくある[19]。

「倦怠」は人間の「心を占める」ことがないという表現や、「情念の墓場」であるという表現からは、ジョクールが「倦怠」を覚える人の精神は不活性な状態にあると考えていることが確認される。また「倦怠」を避けるために「つらい労働に従事しようとする」という一節からは、人間にとってはたとえ苦を伴うものであっても完全な不活性状態よりも活動している状態の方が望ましいとみなされているのが分かる。さらに興味深いのは、ここでジョクールが「倦怠」を覚える人は、また同時に「不安 « malaise »」を抱くとしている点である。もっとも、サン＝ランベールは「不安」な精神状態を指し示すのに « inquiétude » という語を用いており、両者の用いる表現は完全に一致してはいない。とはいえ、二人がひとしく精神活動の停止した状態を否定的に捉え、そのような状態において人間が抱く感情を「不安」と定めている点は注目に値する。そして、精神の不活性状態を避けるために「つらい労働」、すなわち「苦痛」をすら望もうとするというジョクールの主張につながる議論が、第三歌「秋」の加筆部分に展開されることになるのである。

太陽の力が弱まる晩秋の野においては、草花は枯れ、木々は葉を落とし、鳥や獣たちは陽気さを失い[20]、人はもはや外界から心地よい感覚を得ること

---

*L'*Encyclopédie *de Diderot et de ... Jaucourt : essai biographique sur le chevalier Louis de Jaucourt*, Paris, Champion, 1995.

19）Jaucourt, « Ennui », dans l'*Encyclopédie*, t. V, p. 693.

20）Saint-Lambert, *Les Saisons*, « L'Automne », p. 210.

は不可能になる。万物が死滅する物悲しい光景を前に、人はメランコリックな気持ちに陥り[21]、臨終の床にあった友人の様子を想起する[22]。もはや彼の心に去来するのは、愛する人々の死のイメージのみである。にもかかわらず、彼は「好んで（そのような恐ろしい考えに）浸り、／喜んで泣きたいという思いに身を委ね、／暗い空の下、喧噪と世間から逃れ、／いっそう深く苦しみを募らせる」[23] というのである。なぜ人は自ら好んで「苦しみ」を求めるのか。詩人はこの詩句に注記を付して、晩秋における一見矛盾した人間の精神状態を解明しようと試みる。しかしながら初版では、晩秋の野に身を置く人間の視覚、聴覚、嗅覚、触覚が外界から受ける刺激について順次検討した上で、「野はもはや感官に快楽を与えることはない」[24] とし、晩秋に自殺が多いのは快楽の欠乏ゆえである[25] といういささか未消化な結論で考察を締めくくっている。一方、改訂版ではさらに5つの注記を加え[26]、さまざまな事例を示しつつ、人間にとっての「苦痛」の必要性を感官に与える刺激という観点から検討している。まず、人はなぜ「泣くことに喜びを見出すのか」という問いに対してサン＝ランベールが用意した回答を確認してみよう。

> そうだ、豊かな感性を備えていると感じる必要性は実に大きいので、われわれは苦痛によって自身を試し、感受性をかき立てようとする。それゆえ人は、剣闘士［の戦い］、グレーヴ広場[27]、胸を引き裂くような光景へと駆けつけるのである。人は衰弱病[28] よりも、熱や痛風の方がよいと

21）« Ce concert monotone et des eaux et des vents / Suspend et ma pensée, et tous mes sentiments ; / Sur elle-même enfin mon âme se replie, / Et tombe par degrés dans la mélancolie; [...] » : *Ibid.*

22）*Ibid.*, pp. 210–211.

23）*Ibid.*, p. 211.

24）Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Automne › », p. 226.

25）*Ibid.*, p. 227.

26）*Ibid.*, n. 25, pp. 227–229.

27）現在のパリ市庁舎前広場。かつてはここで処刑が行なわれていた。

28）原語は« Maladie de langueur »。原因不明で、緩慢に、かつ漸進的に人を蝕

思うだろう。退屈な会話では、われわれ自身を傷つけるような反論を求める。退屈した人々 « les hommes qui s’ennuient » は、自ら望んで不機嫌になる機会を捉えて不機嫌になり、しかもそれにある種の快楽を覚えるのだ[29)]。

この一節の後半に示される「衰弱病」と「熱や痛風」の対立、「退屈な会話」と「反論」、「退屈（倦怠）」と「不機嫌」の対立から、詩人は、感官の弛緩状態よりも、たとえそれが苦痛であれ、感官が刺激を受け、活性化している状態を望ましいと考えていることが窺われる。「無感動」、精神の不活性状態より「苦痛」を受ける状態を優位におくサン＝ランベールの考え方は、『百科全書』の項目「倦怠」における「人間は倦怠に苦しめられるのから免れるために、この上なくつらい労働に従事しようとすることがよくある」という一節と結びつけることが出来よう。

ジョクールは、人間が「倦怠」すなわち精神の不活性状態から脱するためには、二つの方法があると述べる。一つは、精神が「外界から受ける物理的刺激を受けるがままになる」[30)]、すなわち「感じる」ことによって。もう一つは、「有益な主題、好奇心をそそる主題、あるいは心地よい主題について思索をめぐらす」[31)]、すなわち「熟考、瞑想する」ことによって。このように感性を揺り動かす手段と、理性を働かせる手段という二つの可能性を示すジョクールに対し、サン＝ランベールはもっぱら「苦痛」が感受性に与える刺激の効果に注目しながら論を展開している。それは、詩人が季節の変遷とともに移ろいゆく自然の中に身を置く人間のさまざまな情緒的経験を、外界から受ける物理的刺激に注目しながら解明しようという『四季』執筆当初の自身の意図[32)]に忠実に従いながら、「苦痛」の効用について検討しようとしてい

んでゆく病を指す。

29）Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l’Automne › », p. 227.

30）Jaucourt, « Ennui », dans l’*Encyclopédie*, t. V, p. 693.

31）*Ibid.*

32）Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Discours préliminaire », pp. 58–59.

るからにほかならない。そのことは、「苦痛から得られる喜び」を求める人間の矛盾に満ちたあり方についての考察を包括する次の一節にはっきり表れている。

> 一見、逆説的と思われる真実を述べよう。それは、われわれは時折、苦痛を感じる必要があるということだ。欲望や力を失った無気力状態あるいは衰弱した状態では、われわれはほとんど存在していると言えず、生命力はわれわれから逃れ出て、精神はすっかり衰えてしまう。このような無気力状態はわれわれにとって存在から無への移行を示す。したがって、われわれは生きていることを強く感じさせる苦痛をもってこのような状態から抜け出たいと思うのである[33)]。

「欲望や力を失った無気力状態あるいは衰弱した状態では、われわれはほとんど存在していると言えず」という一節、および、「われわれは生きていることを強く感じさせる苦痛をもってこのような状態から抜け出たいと思う」という一節から、サン＝ランベールは「苦痛」の効用は、感性が刺激されることにより、個人が「自己存在感」を確かめられる点にあるとみなしているのが明らかになる。この「自己存在感」の概念は、詩人がディドロの感覚論的人間論、とりわけこの思想家が『百科全書』の項目「甘美」に展開する「自己存在感」に根ざす快楽に関する議論から想を得て形成したものであり[34)]、『四季』を編むにあたり、人間が享受する最も重要な快楽として自らの

33）Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur l'Automne », n. 25, p. 227.

34）Diderot, « Délicieux », dans l'*Encyclopédie*, t. IV, p. 784. ロックからルソーに至るまでの思想家が「自己存在感」をどのように捉えていたかという点については、以下の論考にまとめられている。Spink, John « Les avatars du ‹ sentiment de l'existence › de Locke à Rousseau », dans *Dix-huitième siècle*, nº 10, 1978, pp. 269–298.

特に、「自己存在感」の概念をめぐるディドロとサン＝ランベールの人間論の関係については、拙稿で既に論じている（Saint-Lambert, *Les Saisons*,

人間論の軸に据えたものでもある。そのことは、既に初版における感受性と快楽をめぐるさまざまな詩句および注記からも確認されるが[35]、さらにまた、1771 年版において「秋」の注記に加えられる「苦痛」の効用に関する考察は、ディドロが執筆した『百科全書』の項目「メランコリー」に見受けられる「自己存在感」についての記述とも結びつけることが可能なのである。

> メランコリーは精神の機能を十分働かせて、甘美な自己存在感を感じさせると同時に、精神を情念の混乱および精神を疲弊させるような激しい肉体的感覚から守る瞑想を楽しむ[36]。

ディドロは項目の冒頭で、メランコリーとは「人間が不完全であることに対するごくありふれた感情」[37]、すなわち、「精神や肉体器官の弱さに起因する結果」[38] と述べている。しかし、上に挙げた一節からは、メランコリーにさいなまれる人間も、「精神の機能を十分働かせる瞑想」を通して、つまり、可能な限り精神を積極的に活動させることによって、「甘美な自己存在感」を享受出来るとする。確かにそれは『百科全書』の項目「甘美」に高らかに謳われるような満たされた感覚、外界から心地よい感覚を受けることによって享受される完全な充足感ではないかもしれない。しかし項目「メランコリー」からは、人間が完全に満たされていない状態においてもなお、存在するという感覚を確かめ、快楽を得る可能性を思想家が模索している様子が垣

« Introduction », pp. 17–27.）が、これ以外にも、サン＝ランベールは夏の野における快楽について考察するにあたり、ディドロが手がけた『百科全書』の項目「涼やかさ」（« Fraîcheur », dans l'*Encyclopédie*, t. VII, p. 274）を参照している（*Les Saisons*, « L'Été », pp. 139–145）。

35）Cf. Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Le Printemps », pp. 78–79, 95–96 ; « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Été › », p. 170 ; « L'Automne », p. 211; « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Hiver › », p. 271.

36）Diderot « Mélancolie », dans l'*Encyclopédie,* t. X, p. 307.

37）*Ibid.*

38）*Ibid.*

間みられる。快楽を得るには決して好ましいと言えない条件下で人間がいかに充足感を楽しむことが可能かという問いに対して、サン＝ランベールがディドロと同様の観点から回答を示そうとしているさまは、1771 年刊行の『四季』改訂版から認められる。というのも、詩人はこの版に加えた注釈の一つで、嵐が吹きすさぶ晩秋の野では、人はメランコリックな心境に陥ると同時に「恐怖」を覚えるものの、そのような状況においてすら、人は危険が差し迫っていない限り、「自分が存在している」という喜ばしい感覚をはっきり感じ取ることが可能だとしているからである[39)]。

1771 年版に加えられた「苦痛」の必要性に関する長大な考察は、外界からもはや心地よい物理的感覚を得ることが期待出来ない晩秋においてすら、田園に生きる喜びをいかにして読者に伝えるかという問題――この問題に初版刊行時には未解決のまま残されていた問題――に対して、詩人が示した回答であると言えるだろう。

実際、1771 年版においては、「序文」に加筆された次の一節によって、「自己存在感」に根ざす快楽を基本軸として田園に生きる喜びを謳おうという意志が作品冒頭からより明確化されることとなる。ここでサン＝ランベールは、詩の起源は人類の起源にまでさかのぼるとして、韻文を制作したいという欲望は、人間性に内在するものだと強調する。

> 動きや音に拍子が加えられると、それほど注意しなくてもその動きや音を継続させることが可能になる。すると、人は一度にいくつもの能力を発揮出来るようになり、歌ったり、労働したりする。精神は思考し、身体は活動し、人はより一層強く自己存在感を感じる。そしてただそれだけの理由で人は一層幸せになるのだ[40)]。

韻文の起源は散文のそれに先立つという主張は、古代ギリシャ・ローマ時代

39）Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Automne › », n. 25, p. 227.

40）Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Discours préliminaire », n. 1, p. 55.

から存在するが、18 世紀フランスにおいては特に、コンディヤックやルソーをはじめとする思想家たちが言語の起源に関する論考の中で盛んに取り上げられたものである[41)]。危機に瀕していたフランス詩に新たな息吹を与えるべく、20 年あまり温め続けてきた自然の歌を世に問おうとするサン＝ランベールが、韻文の起源は人類の起源にまでさかのぼるというテーゼを拠り所とするのはごく自然なことだと考えられる。しかし、詩人はこのテーゼをただ自己弁護のために引き合いにして満足しているだけではない。先の引用文の後半、とりわけ韻文のリズムは心身に刺激を与え、人に「自己存在感」、快楽を与えるという主張からは、サン＝ランベールが詩の起源に関するなかば人口に膾炙したテーゼを自らの人間論にかなう形に変奏していることが確認される。

＊＊＊

『四季』1771 年版に認められる改稿箇所からは、サン＝ランベールが『百科全書』の項目に展開される感覚論的人間論を踏まえながら、苦痛と快楽に関する思索を深めてゆく過程が確認されたが、それは、詩人がまず読者として、百科全書派の著述家を想定し、彼らからの支持を得ようとしていたからに他ならない。実際、『四季』第二歌「夏」の注記において、サン＝ランベールは『百科全書』に寄稿した二つの項目を引き合いにし、大事典と自分の作品との連続性を示すのみならず[42)]、この自然の歌の結論部分に『百科

41）Condillac, *Essai sur l'origine des connaissances humaines,* Seconde Partie, chap. VII, Paris, Éditions Alive, 1998, pp. 213–214 ; Rousseau, *Essai sur l'origine des langues*, chap. XII, *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. V, 1995, p. 410.

42）Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Été › », pp. 169–170 (cf. « Manière », dans l'*Encyclopédie,* t. X, pp. 34–36) et pp. 174–175 (cf. « Législateur », dans l'*Encyclopédie,* t. IX, pp. 357–358). 特に「夏」の注記に項目「立法者」の一部が引用されていることの意味については、以下の拙稿で検討した。« Jean-François de Saint-Lambert, lecteur et collaborateur de l'*Encyclopédie* : autour d'une note sur ‹ l'Été › des *Saisons* »,『「百科全書」・啓蒙研究論集』（『百科全書』研究会）、第 2 巻、2013 年、pp. 115–130。

全書』の編集者たちへのオマージュを捧げている[43]。さらにまた、『四季』初版出版後の改稿作業において、詩人がもっとも考慮に入れたのは、『文芸通信』に掲載されたディドロの批評であった。

『四季』は、初版出版後に作者自身によって大幅な加筆修正がほどこされたフランス文学史上きわめて特異な作品である。しかし、作者は決して初版を不完全であるとみなしているわけではない。実際、本稿で確認したように、第二歌「夏」および第三歌「秋」に付せられた注記への加除作業からは、詩人が「自己存在感」を軸とした自身の人間論を深化させようという意志がはっきりと表れている。

『四季』「序文」は次のような高らかな宣言で結ばれている。「私は感謝の念をもって批判を受け入れよう。作品が凡庸でしかないなら、批判は役に立たない。作品が優れているなら、批判によってその作品はよりよいものになるのだから。」[44]「序文」における宣言を実践に移すかのように、サン＝ランベールは晩年に至るまでその長大な自然の歌に手を加え続けた。その忍耐強い作業からはおそらく、詩人としての矜持を読み取るべきなのではないだろうか。

付記：本研究成果は、平成 26 年度文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（C）（課題番号 26370366）の助成を受けたものである。

43）Saint-Lambert, *Les Saisons*, « Notes de Saint-Lambert sur ‹ l'Hiver › », p. 289.

44）Saint-Lambert, *Les Saisons,* « Discours préliminaire », p. 67.